ニベンの父

ニベンの父
フローリン・ジェリル　翻訳・批評

序文:
誰かの伝記を書くことは難しい。題材の人物を見極めるにも、いつも何冊もの年代記に書かれた偏った記述を見比べなければならない。以前、聞いたことがあるのだが、ウォーヒン・ジャースは彼の代表作『ソリチュードの狼の女王伝記』を書くのに100冊を超える同時代の物語を調査した。似たようなことをするものとしては、この程度のことで不平を言えない。

ここにある男の記録がある。名前は水先人トパル、タムリエルの初期のアルドメリ探検家として知られる。叙事詩『ニベンの父』は、現代にわずかに4つの断片を残すのみである。しかし、これらの断片が、水先人トパルがタムリエルの周りの海を航海していたかもしれないという、論争の余地ある面白い見解を神話紀中期に提供した。

『ニベンの父』は水先人トパルの航海を書き連ねた記録文書にすぎないが、彼の存在を証明するだけのものではない。サマーセット島にある大水晶塔の財宝の中に、彼の荒削りだが人を魅了する地図がある。それは彼が全タムリエルに残した遺産である。

アルドメリの"Udbendra Nibenu"の翻訳、『ニベンの父』は私の作品であり、他の学者は私の選ぶ言葉に賛意を示さないかもしれない。私は原作の美しさに応える翻訳に仕上がる保障はできない。私はただシンプルで首尾一貫したものを目指す。

断章 1

二番目の船にはパスクイニエルが乗っており、水先案内人は
イリオ、「道の石」の指す南方へと
向かった 三番目の船にはニベンが乗っており、
水先案内人はトパル、彼らは「道の石」の指す
北東へと向かった
水晶塔から命令を受け、
八十ヶ月の航海をし報告に戻る
ニベンだけファーストホールドへと戻り、そこには
金や香辛料、毛皮、生きてる死んでるに関わらず
変わった生き物が空高く積まれていた
エルノフェイのトパルはなにも見つけられなかったが
航海で訪れた驚きの地
すべての話を語った
六十六昼夜、彼は激しい波に打たれ、
渦巻きをやりすごし、

炎のように焼き付ける霧の中を航海していたところ
大きな湾口に着き、
彼らはおだやかな谷の陽光に輝く野原に降り立った
乗員が皆休んでいると恐ろしいうなり声が聞こえてきた
真っ暗な谷から見るもおぞましい海の怪物が姿を現した
人を食べてしまう歯には血の塊がついていた

何世紀もの間、古代アルドメリの難破船やら桟橋から、奇妙な水晶玉のようなものが発掘された。それは深遠の暁―神話紀の芸術品で、それぞれが具体的な方向へその軸を回転させる性能のものであるとわかるまで、考古学者たちは頭を悩ませた。それは南を指すもの、北東を指すもの、北西を指すものの3種類あった。

それらがどのようにして動くのかはわからないが、ある特定の力と波長が合うつくりになっているようだった。これが「道の石」のかけらであった。それぞれの船の水先案内人が自分の船を行きたい方向へ向かわせるのに使っていた。北西の道の石を持つ船は、船体を北西のスラスやヨークダへ向かっていった。パスクイニエルは南の道の石へ、ピアンドニアへ向かって航海しなければならなかった。トパルと彼の北東の道の石はタムリエルの本土を見つけた。

この断章から、3隻の船が旧エルノフェイへ戻る道を探すよう指令を受けていたことがわかる。今もサマーセット島で生きるアルドメリが、祖国の姿を知るためであった。本書は水先人トパルの研究を目的としており、アルドメリが旧エルノフェイから集団移動したことに関する説を論じる余地はない。

この詩を自書の引用元としてのみ使うならば、数隻の船は旧エルノフェイを去ったあと嵐に遭ったという言い伝えを信じている学者に賛成する。生き残った人々はサマーセット島へ帰る道を見つけたが、「道の石」を持っていなかったため祖国がどちらの方角にあるのかはわからなかった。結局、この3隻がまったく別の3つの方向へある1ヶ所を探しにいく理由はどこにあるのだろうか?

もちろん1隻だけ戻ってはきたが、ほか2隻のうち1隻、もしくは2隻ともが旧エルノフェイを見つけられたのか、海上で滅びてしまったのか、古代ピアンドニア、スロード、ヨークダの近くまで行けたのかどうかはわからない。アルドメリが特に頭がおかしいのでなければ、3隻中少なくとも1隻は正しい方向へ向かっていたものと思われる。それがトパルであったのだろうが、彼は北東といってもそれほど遠くまでは行かなかったのであろう。

トパルは船をファーストホールドから北東へ出した。偶然にもほかのどんな陸地も見つけずにアビシアン海へと向かう航海ルートであった。もし彼が東へ真っ直ぐ向かっていたら、現代のシロディールのコロヴィア西部へ数週間のうちに到着し、もし南東へ向かっていたら数日でヴァレンウッドの丘へ到着していた。しかしこの水先案内人は、自分を信じて、我々が現代でも使う地図を頼りに、アビシアン海を抜け北東へ真っ直ぐ船を走らせ、イリアック湾へと入っていき、出航して2ヶ月後には現代のアンチクレールの近くの土地へと辿り着いた。

この詩の中で、南方にある緩やかな起伏の丘があるところと言えば、ハイロックとしか思えない。その場にいたものは誰でもそう思ったであろう。当然、問題は海の怪物がその地にいたとするこの明確な言及は何なのかということ

だ。怪物はアルドメリが入植するまで出現しておらず、広がったのはレスデインの時代、トリニマックとボエシアの有名な戦いの後のことだからである。

言い伝えが間違っている可能性もある。海の怪物はアルドメリの植民地化より前にいた原住民だったのではないだろうか。おそらく呪われた人--— アルドメリでいう「オーシマー」で「オーク」と同じ言葉-- とは別の生き物、つまり別時代の海の怪物に同じ名前が与えられたのであろう。この詩がここで終わってしまったのは実に残念で、そこには残された疑問を晴らす手がかりがあったであろう。

一つ目の断章と二つ目の断章の間は、かなりの部分が失われた。その間にさらに80ヶ月が過ぎたに違いない。なぜならトパルはその時タムリエルの逆側におり、旧エルノフェイを見つけられなかった後で、南西のファーストホールドへ戻るよう航海の準備をしているからだ。

断章 2

網でできた絶壁が巨大なあごのように突き出ており、
西の方には航路がないことがわかり、
ニベンは南へと船を出した。
聖域と平和を約束する
砂と森林に覆われた島を通りすぎた時、
乗組員は喜び騒いだ
だが垂れ下がった岬に似た革でできた羽のような木の上に
巨大な影が現れた時、歓喜は恐怖へと変わっていた
船ほどの大きさのコウモリトカゲであったが
よい水先案内人であるトパルはただ弓を構え、その頭に一撃を加えた
トカゲは倒れ、トパルは船員長に聞いた「死んだかな?」
トカゲが白波にぶつかる前に、今度は心臓にとどめを刺した
それから四十日と六日、ニベンは南へ船を走らせた

トパルの案内人、製図家、生存能力、談話家としての武勇伝に加えて、弓矢の名手であることがわかる。もちろん詩的許容であるが、神話紀のアルドメリは洗練された射手であったことは考古学的にも証明されている。彼らの弓は木を重ねたもので、銀の絹糸で警笛が下げられており美しいものだった。何千年も前の専門家も絶賛している。

この断章の初めでトパルが立ち向かう生き物は、その怪物は竜を思い起こさせるが、現代のモロウウィンドにいる崖に住む種族の祖先のようだ。海岸線の足場の悪い不安定な崖はネクロムのように思える。ゴルン島は「コウモリトカゲ」の巣であるのかもしれない。ただし、私が今知る限りの情報では、モロウウィンド東部にそのような生き物はいない。

断章 3

悪臭のただよう、邪悪な沼地でヒトカゲは
東に撤退し、トパルと仲間たちの心臓は
ダイヤモンドブルーの澄み切ったすばらしい海を
目にし、喜びに打たれた
三日間、彼らは大歓声の中、北西へと船を進めた
ファーストホールドは彼らを手招きしたが、希望はついえた
恐怖の中、上陸すると防御の盾が
立ちはだかるようだった
水先人トパルはひどく憤怒し、彼が正確にひいた地図を調べた
南へ行く最善の航路は、大陸の終わりはどこなのか
北へ蛇行する川を進むべきか
「北だ!」彼は悲しい表情を浮かべる仲間に叫んだ
「今すぐ北へ行くんだ! 大丈夫、北だよ!」

トパルの動きを追うと、彼はモロウウィンドの端を通り、ブラック・マーシュ南部を探求しているのがわかる。見たところ、できるかぎり彼の「道の石」に従うように決めているようだ。彼が去ろうとしている沼地は、おそらく現代のギデオンの近くであろう。我々は今トパルの性格を知ることで、ブラック・マーシュとエルスウェーアの間の湾で彼の感じた失意を感じることができる。

彼は、積極的に自分の使命に従い、河を通って南東に向かい、ファーストホールドへ到着する。彼の地図を見ると、モロウウィンドの内海へ緻密に計画を練っている。彼が通行可能な水路、つまりブラック・マーシュからの泥の多い支流のいくつかを通ろうとしたのがわかる。確かに彼の後、ほかの多くの探検家が、病気や獰猛なアルゴニアンの襲撃によって探検を思い止めさせられた。

今、手元にある現代のタムリエルの地図を参照すると、彼が南へ行くべきところで北東への道を選んでいたという間違いに気づく。当時の彼には、果てしない本土はただの突出した半島であるとは知る由もなかった。彼は既に南へと遠く旅していることに気付き、河を上るという賢明な、しかし誤った判断を下した。

この大きな誤算が歴史上において彼の評価を下げることになってしまったのは皮肉なことである。彼が果てしなく続く海だと思ったのは湾で、今日ではトパル湾として知られている。また、彼が道に迷ってしまった河は、船の名前を分けてニベン河とされている。

断章 4

動物のように歩いたり、直立して歩いたりする猫の悪霊たちが
河沿いを駆けながらも、緑色の目は常に船に合わせ、
シューシューと息をもらし、唾をはきながら怒りの
ふるえた声をあげている
木には果物がなっており船員たちを誘惑するが、

河岸に降り立つ勇気はまったくなかった
腕を河岸へ下ろしつかみとろうとし、
猫が飛びつく前にすばやく果物をつかんだ
十一日間にかけて彼らは北へと進み
ようやく水晶のようにきらめく湖にたどりつき
そこには美しさと平和を超越するかのような
八つの島があった
輝く色をした光まばゆい空飛ぶ生き物が
彼らに向かってアルドメリ語で挨拶をしてきた
船員たちは彼らが何を言っているのか分からなかったが
ただ単純に彼らの言葉を繰り返しているのだと気づいた
彼らの言葉を理解しているわけではない
でも何かしゃべっている
船員は笑った
水先人トパルその島に魅了され
そこには翼の生えた人種が生活していた
ニベンもそこに一ヶ月過ごした
そして鳥人は彼らの言葉を習った
船員たちは彼らの言葉を習い
鉤爪状の足での文字の書き方も習った
新しい知識に喜び、彼らはトパルを自分たちの国王にし
彼らの島を
贈り物として捧げた
トパルはいつの日か帰ろうと思っているので
まず最初に東のファーストホールドへの水路を探さなければ
遥か彼方の

最後の断章はいくつかの理由もあってほろにがい。

我々は、水先案内人が出会ったこの奇妙で親切な翼の生えた人々は絶滅することを知っている。―実際に、シロディールのこの鳥の生き物にふれているのは、この詩だけである。トパルは彼らに読み書きの能力を与えたが、残念ながら彼らを最後の運命から助ける力にはならなかった。多分「猫の悪霊」ことカジートの祖先の手にかかったのであろう。

トパルと船員たちは、8つの島からの航路(現代のシロディールからイリアック湾を通る)を見つけることはできない。彼の地図が、詩に残されていない物語を語っている。
彼らはニベン河から上がってルマーレ湖への航路を取ったことがわかる。またそのあと彼の目的の場所へはたどり着けない支流を試してみたようだが、トパルの失意が感じられる。彼とともに長く苦しんだ船員たちの失意も同

様だ。彼らはニベン河からトパル湾へと戻っていった。

ここで彼らの初期の間違いが決定的になる。エルスウェーアの半島を通ったことが原因だったのだ。結果的に彼らは海岸線を旅し、ヴァレンウッドの海岸を通って祖国へと帰っていった。普通、叙事詩であれば幸せな結末で終わるのだが、これらの詩は1つ1つで孤立し、完成部分が失われている。

現代のシロディールの奇妙な鳥の生き物に加えて、オーク(おそらく)の祖先や崖に住む種族の祖先、アルゴニアンの祖先、この最後の断章でカジートの祖先を垣間見られた。この単調な詩の数行に歴史が確かに息づいている。それというのも、1人の男が帰路を見失い、ありとあらゆる間違った方向へ行きつ戻りつしなければならなかったからだ。

ニベンの父

FormId	skyrim.esm:01B008
Owning plugin	skyrim.esm
Local FormId	01B008
Editor ID	SkillMarksman4
Inventory image	(none)
Menu art	HighPolyBasicBook06
Value (gold)	65
Type	Book or tome
Weight	1
Can be taken	Yes
Teaches	Skill: 弓術
Inventory description	(none)
Keywords	VendorItemBook, GiftWarriorSpecial, GiftThiefSpecial
Locations	5
Leveled lists	0
Scripts	0

© Bethesda Softworks LLC and the authors of the mods in the load order.
Exported and generated with SkyrimSourceExporter.